

東北女子大学

米澤 暢子

目的 冬が長く寒さの厳しい津軽の地は中央から遠く貧しい土地柄であった。藩としては勸農と厳にせいたくをおさえることにより、経済の破綻を防いだ。とくに自給自足を旨とし衣服については特別な掟があった。本報は津軽藩の衣服に関して生まれたこぎん刺しの発祥と変遷について報告する。

方法 津軽藩諸法度よりこぎん刺しに関する部分を抜書きし、その背景を考察した。

結果 津軽藩では身分により衣服の範囲を定めた。農民たちは麻しか着られず、そのために衣服の貴重さと保温・補強の目的でこぎん刺しが生まれた。麻布を麻糸で刺し埋めて着る刺し子の方法は生活の知恵として生まれたものである。農民は「差綴り・差小中の短物を着よ」とお達しがでていた。刺し子をした単衣で着丈も短かくおくみのつかない着物を着ていたのである。幕府の巡見使の随員として来遊した、古川古松軒の紀行文には「いろいろの模様を縫ってあり、手縫なることこの名産とす。上方者にては木綿糸をしてかくの如く着しく刺し縫うこと叶うまいとみなみな見物せしことなり」と書かれている。明治に入ってから農民も木綿の使用が許され入手が自由になると、こぎん刺しも隆盛をきわめ、労働着から普段着へ、そして晴着となり模様も精巧になった。明治24年9月に東京～青森間の鉄道が、27年12月には青森～弘前間の鉄道が開通するにともない、物資の入手が便利になり、安くて美しく見える上方の反物が出まわらうようになると、こぎん刺しは田舎くさいとして急速に衰退した。しかし、今では手工芸的こぎん刺しとして、新しい時代感覚のもとに、伝統文化保護の意味で、こぎん刺しの良さが見直されている。